ハートのジャック

夏目洋介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハートのジャック

【Ｎコード】
Ｎ９４６４Ｄ

【作者名】
夏目洋介

【あらすじ】
田舎町で始まった連続殺人事件。犯人は・・・鬼！？

第一章　第一節　始まりの始まり

「お願い・・・やめて・・・」

「顔を見られたからな。悪いけどあきらめてくれ」

男はナイフを振り上げた。ナイフが月に照らされ、輝きを増した、と同時に

「いやぁぁぁぁ～！！！」

という女の叫び声が響いた。その瞬間、女は何も言わない物と化した。

「ちっ、やっちまったか。」

男はそう言ってつばを吐いた・・・その顔には女の血が飛び散って赤く染まり、まるで鬼そのものだった・・・。

・・・

「ねぇねぇ、知ってる？」

桜井琴子（さくらいことこ）はそう言って僕の肩を叩いた。新聞部の部室の窓際に座り、そろそろ咲きそうな桜を見つめたまま僕は、

「いや、知らないな。」

そっけなく答えると、琴子は、

「まだ何も言ってないじゃ～ん。ってかそれなら聞いてびっくりだよ。T市の連続女子高生殺人事件。昨日また被害者が出たんだって！これで三人目だよ。」

僕はようやく振り向いて彼女を見た。

「昨日？いや、知らなかったな。」

「徳井高校新聞部ともあろうものが・・・ちゃんとニュースくらい見てよね。」

ふくれっつらで僕を見つめる琴子。本気で怒っていない事は分かっている。

「ごめんごめん、で、どんな状況？」

笑顔で僕は質問をした。

「やっぱり出ましたよ、お兄さん。被害者の首筋に『鬼』の傷文字。犯人はやっぱり一人目二人目と同じ、”鬼”ですね。」

僕はそれを聞いて口元がゆるんだ。それを琴子に見られていたみたいで、

「おっ、興味をそそられたかい？徳井高校始まって以来の天才。高宮秀太君。」

「ん？まぁね。」

「ではでは一緒に取材に参ろうではないか。」

琴子はそう言って僕の腕を強引に引っ張っていった。

・・・確かに興味をそそられる事件だ。

第一章　第二節　現場百回

放課後、琴子に連れられＴ市に向かう。Ｔ市は僕達が通う徳井高校の隣町。電車で２０分くらいで着く距離だ。市、というよりは町といった方がいいのではないかと思うくらい田舎で、こんな街で殺人事件なんかが起きたから、Ｔ市は街始まって以来の大騒動だ。

「さて、Ｔ市に着いたわけですが・・・どうしようか？」

自分からさそっておいてさっそく頼りない。

「とりあえず、遺体が見つかった現場に向かってみようか。

「そ、そうだね。ではでは、いっそげ～」

～その１、地下道～

「え～と、私の調べによると、ここが第一の殺人、『野宮加奈』さんが殺害された所ね」

現場を見てみると一見して普通の道だ。とても殺人があったとは思えないほど閑散としている。二人で現場を歩くと、たくさんの花が飾られている一角があった。

「ここね。んっ？何か書いてある・・・」

（加奈、やすらかに眠ってね。）

（加奈ちゃん何で・・・）

（犯人はきっと捕まるからね）

たくさんの手紙が花と一緒においてあった。と同時にそれは、ここで人が死んだということを教えてくれるものであった。

「何だか・・・こんなとこで殺されて、可哀想だね。」

琴子はそう言って花に向けて拝んだ。

～その2、神社～

「ここが、二人目の現場かぁ・・・。」

二人が立っているのは名もないような小さい神社だった。ここもやはり人っ子一人いないみたいで寂しさのみをそこに主張しているように見えた。

ここにも先ほどと同じように花が手向けられているところを見つけた。先程の現場よりも花の数は少なく、手紙などはなく、コーラのペットボトルなどが置かれている。

「第二の被害者『田村理恵』さんは知り合いが少ない子だったのかな？」

琴子がそうぼそっと言うと、後ろから、

「お知り合いの方ですか？」

びっくりして振り向くとそこに、坊さんみたいな人がいた。

「いや、私達、新聞部・・・じゃなくって、そう、友達だったんです。ここで亡くなった理恵さんの。」

琴子にしては上手い嘘だ。坊さんはすっかり信じこみ語りだした。

「そうですか・・・。いやぁそれは悲しいことでしょう。いや、先日ね、ここに母親が来られまして。それがもう見るに見られないくらい泣いていましてね。もう娘さんの名前を叫び続けて泣き崩れてましたよ。」

琴子は下を向き、ちょっと泣きそうになっているみたいだ。僕はそれを見て、

「そうですか。僕らもそんなに深い付き合いではなかったのですが・・・。手厚いご加護をお願いします。」

そう言うと、坊さんは祈りをささげてくれた。僕と琴子もそれに倣って手を合わせた。

〜その3、空き地〜

「ここが、今朝のニュースで見た三人目『田上光』さんの遺体発見現場ね。」

現場を見るとさすがに昨日の今日ということでまだ捜査員の人たちが何かをしているようだった。この中を押し入っていくことはさすがに強引な琴子でも出来そうにないので少し離れたところで様子を伺う。

二人でぼ～っと見ていると、琴子が、

「ねぇ、高宮。何で人は殺人なんかするんだろうね。」

と言った。僕は、

「僕は殺人者ではないから分からないよ。」

と顔も見ずに答えた。

「私ね、テレビでニュースとか見るのが好きで、こんな事件があった、こんな事故があったって人に話すのが趣味だったんだ。それで新聞部に入ったんだけど・・・今日初めてこんなに近くで人が死んだ殺されたって話を聞いて、何だかすごい悪いことをしている気になっちゃったんだ。そっとしておいた方がいいんじゃないかって。私なんかが割り込んで行っちゃいけないんじゃないかって。」

琴子はそう言って下を向いてしまった。かなりまいっているみたいだ。僕は彼女の肩を抱き、

「君はただの趣味でこの取材をしているのかい？違うだろ？君が取材をして出来上がった記事をみんなが読む。みんなはこの事件の怖さから周囲を気をつけるようになる。そして亡くなった人への気持ちから人が亡くなるということを考えるようになる。今の君のようにね。今日、君が思ったこと。みんなが求めているのは今の君なんだ。」

僕はそう言って琴子の眼を見た。琴子は一瞬うるっとしたが、下を向きもう一度僕の目を見た時にはいつもの琴子に戻っていた。

「へへへ。高宮に慰められるなんてね。私ともあろうものが。うし、取材もすんだし、マック行って帰ろう！」

琴子はそう言って、僕の腕を引っ張った。

第一章　第三節　疑問と確信

次の日、さっそく琴子と二人で昨日取材した資料を元に校内用の新聞の作成に取り組んだ。現場の状況、そして遺族達の悲しみをテーマに殺人事件というものの恐ろしさ、そして実際に現場を見た僕達の気持ちなどを取り入れた。

僕達二人しかまともに活動している新聞部員がいないので全てを自分達で作り上げた。

「よしっ、でっきた～！」

出来上がった新聞を掲げ、琴子が叫んだ。

「やっぱ天才、高宮がいると文章表現が上手くいくね。いい出来、いい出来。あとは顧問の中林に許可をもらって印刷してもらうだけ・・・」

部室の扉が急に開き、髪が薄くなりかけて地肌がうっすらといた頭が見えた。

顧問の中林だ。

「何を作っているんだ？ん？」

そう言って琴子の持っていた新聞を取り上げじっくりと見つめた。めがねを時おり、くいっとあげるその姿はとてもじゃないが人に好かれるものではない。

すると、急に中林は新聞を一気に引き裂いた。

「何するんですか！」

琴子が叫んだ。僕も思わず立ち上がった。が、それを制するように中林は新聞を放り投げた。そして、

「人の不幸をみんなに広めることなんてないだろう？君たちが逆の立場だったらどうする？そっとしておいてもらいたいだろう？君たちには人の不幸が分かる人間になってもらいたい。」

中林はそう言って部室を出て行った。琴子は破られた新聞をつかみ、

「ひどいよ・・・二人でこんなに頑張ったのに・・・。写真まで撮って文章も考えて何とか出来上がったのに・・・」

琴子は泣き続けた。僕は破られた新聞を拾い上げ、見つめた。それには第三の被害者『田上光』が殺害された現場の写真で、捜査員や制服警官がうじゃうじゃ写っているものだった。僕はそれを見て、口元が微笑んでしまった。

（なるほどね・・・。）

琴子はまたもや僕を見たらしく、

「こらっ、乙女が泣いてたら慰めんかい！」

と言ってフックをかました。

第一章　第四節　捕獲

中林に新聞を破られたのが相当こたえたらしく、その後、琴子の鬱憤を晴らすためファミレスに付き合うことになった。

三杯目のジャンボチョコレートパフェをほお張りながら、

「ってか中林むかつくよね。あれを記事にしなくて、何を記事にするんだって感じ。本当に新聞部の顧問かよ。あ～腹立つぅ～」

琴子のダイエットは当分できそうにないな。

さてと・・・

「じゃあ、僕は先に帰るよ。」

「高宮まで裏切るわけ？うぅぅぅ～。いいも～んだ。」

琴子はそう言ってまた大きな口でパフェをほおばった。

・・・

「すっかり遅くなっちゃった。」

ファミレスから出た琴子はそのまま帰り道のバス停に向かった。

周りはもうすぐ１１月にさしかかろうという季節そのままに暗くなり始めている。

（何日か前はこの時間でもまだ明るかったのにな。）

暗がりが気持ちにも暗闇も差し込んだように琴子は怖くなってきた。周りには誰もおらず、琴子の靴跡がカツーン、カツーンと響くだけだ。

（やっぱ殺人事件の取材なんかしなけりゃ良かった・・・怖いよ～）

すると、今まで一つしか聞こえなかった靴跡がもう一つ聞こえた気がした。琴子は怖くなり歩調を速めた。すると、もう一つの足跡も全く同じように靴跡を重ねる。琴子は怖くなり、走った。すると、もう一つの足跡も全く同じ、いや、さらに早い速度でどんどん近づいてくる。

そして、靴音が真後ろに聞こえ、振り返ろうとした瞬間、

頭に鈍痛を感じると共に、琴子の意識が途切れた・・・

第一章　第五節　鬼誕

暗い倉庫の中、心もとない電球がチカチカと点滅をしている。その反復がまるで人の心臓のように何度も何度も繰り返される。時には力なく明かりを消してしまう時間もあるのだが・・・

「くそっ、どこだよ！」

男は女子高生のバッグをあさっている。そのバッグにはキーホルダーがついており、そこには『琴子』と書かれている。

「何でないんだ！」

男はバッグを投げ捨て、頭を抱えた。

「あれが人の目についたら・・・。俺はおしまいだ！！」

近くのバケツを蹴り飛ばす。するとそこから・・・

「探し物はこれですか？」

少年が顔を出した。その手には男が探しているものが・・・

「お前は・・・高宮！なぜそれを・・・」

男、中林は驚いた顔で僕の顔を見た。そして、僕の持っているカメラを。

「先生が僕達の新聞を見ていたとき、僕は途中の先生の表情の変化

を見落としませんでした。人は予想外のものを見たときに、目を丸くし、一点を見つめます。先生はこれを見たんじゃないですか？」

僕はそう言って一枚の写真を持ち上げた。そこにはたくさんの警察、の中に警察の格好をした中林の姿があった。

「僕は探偵ではないので、先生が現場で何をしていたか分かりません。が、恐らく証拠となりうるものをなくしたと言った感じでしょう。それ以外、殺人事件があった場所に殺人が嫌いな先生がわざわざ警察の格好をして行くわけないでしょうからね。恐らくは、先生が持っているカバンの不自然に切れているキーホルダーってとこでしょうか？」

中林は下を向いたまま口を閉じたままだ。口元からは泡がぶくぶくと出ている。何かを言っているみたいだ。

「俺は・・・鬼だ。」

第一章　第六話　愛されるべき被殺人犯

中林はぼそぼそと呟いて僕の方を見た。

「俺は鬼だ。お前なんかに正体がばれてたまるか！！死ね！！」

中林はそう言ってナイフを振り上げた。僕はそれをいなして中林の後ろに立ち、ナイフを持つ右腕をねじりあげた。

「いててててっ」

中林は情けない声を上げて苦しそうな声を出した。ナイフは乾いた音を立て床に転がった。

「先生ぇ・・・。人って死ぬとどうなるか分かります？特に殺された人は・・・。知らないでしょうね。見せてあげますよ。」

僕はそう言って中林の耳元でささやいた。

「ほら、思い出してください。まずは一人目野宮加奈。今正面にいますよ。正面から心臓を一突きですか・・・。あぁ、胸から真っ赤な血がどばどば流れてますね。かわいそうに彼女、両手で胸を押さえても全然血が止まらないで焦ってますよ。ほら、血は赤いのに顔は青白くなってますよ。先生、彼女の顔見たでしょ？覚えてますよね。ほら、こっちを見てますよ。あぁ手を伸ばしてきた。『私の血を止めてください』だって。先生、どうします？」

中林は目の前を見るのが怖いのか左手で空をかき混ぜ、顔をぐるぐると動かし、奇妙な声を上げている。

「次は二人目田村理恵。おや？彼女はお腹をめった刺しですか？お腹が血だらけでぐしゃぐしゃですね。うわ、なんかお腹からでろーんとたれてますよ。『私の腸が落ちちゃった、拾って』だって。先生、拾ってあげてください。」

「やめろ、やめてくれ～」

中林は目の前の光景に驚き、そして恐怖に怯えた。

「最後に、田上光。おや、彼女は自分で説明してくれるみたいですね。」

『返して・・・。みんなが可愛いって言ってくれた。彼氏が好きって言ってくれた。私のきれいな顔を返せ～』

田上はそう言って中林に手を伸ばした。その顔にはナイフが突き刺さっており、そこから止めどない真っ赤な血が流れている。中林は恐怖のあまり声も枯れんばかりの叫びを上げて気を失った。

「・・・先生、自分がやった人たちでしょ？何を怯えているんですか。」

僕は倒れている中林に向かい、そう言い放った。

第一章　第七話　真実

「気付いたらあそこにいたんだ。」

薄暗い部屋の中、髪も薄くなりかけた中年の男が茶色のコートを着た中年の刑事に話した。中年の男の髪は薄く、真っ白になっており、顔にある、眉、髭なども真っ白でまるで浦島太郎が竜宮城から帰ってきたときみたいだ。

「う～ん・・・それはいいとして、じゃあ何で鬼の文字を首に傷つけたんだ？」

さっきの茶色のコートとは別の若いスーツの刑事が聞いた。中林は一度下を向き、考えるようにして、こう呟いた。

「確かに女の首に文字を彫った。だが、一人目だけはやっていない。俺はテレビで鬼の文字の話を聞いて、まるでお前は鬼だと決め付けられたみたいで・・・怖くなったんだ！止まらなかったんだ！俺は鬼なんかじゃない。鬼じゃないのに・・・」

中林はそう言って頭を抱えて泣き叫んだ。二人の刑事はふーっと一つ溜め息をついた。部屋には中林の止めどない嗚咽だけが響いた。

・・・

「ふーん・・・ま、いっか。」

僕はイヤホンを耳から外した。あの日、中林を隣町で見たのは偶然だった。何となく心にひっかかるもの、臭いがし、後ろをつけた。

すると、中林が殺人を犯した。僕は、「あぁ、やっぱりな。」と思った。ある程度分かっていたものが心にあったからそんなには驚かなかった。だが、それではつまらなかった。そこで、中林が殺人を犯したときの顔”鬼”として彼を認めてあげようと思った。

女の人の首に彫刻刀で字を彫るのは案外難しかった。血が吹き出るし、何より上手い字が書けなかったのが残念だが、読める字なのでよしとした。次の日、ニュースを見て僕はほほえんだ。

中林を警察に突き出そうとは思わなかった。面白かったからだ。しかし、予想外に彼は殺人を続けた。しかも”鬼”という文字つきで。それにはさすがに驚いた。僕は彼に殺人を続けてもらおうと思った。僕の作り上げた鬼がどこまで育つかが楽しみだったからだ。

しかし・・・やめた。桜井琴子。彼女の涙を見た僕は中林がひどく面白くない人間に思えたからだ。

僕は空に向かい、一つ溜め息をついた。

（どうしたんだろうな。）

「おっはよ～」

不意に肩を思いっきり叩かれた。振り向くとそこには琴子がいた。

「ねぇねぇ、昨日のニュース見た?犯人捕まったね～って中林じゃん!うわっ、こっわ～。校門のところ、マスコミがすごいことになってるよ。でも・・・犯人が捕まってよかった。これで殺された人たちが少しは報われるね。」

琴子はそう言って空を見上げた。綺麗なひとだ。僕はしばし、彼女の顔を見つめ、

「あぁ、よかったよ。」

と、最高の笑顔と共に、返事を返した。

～第一章　完～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9464d/

ハートのジャック

2010年10月24日09時00分発行